

迅速な対応で最後の願いを叶える

連載

豊かさを届ける 福祉用具サービス



笠目妙子さん

昨年、余命1カ月の診断を受けたがん末期の男性利用者Aさんを

福祉用具大手ヤマシタ（静岡県島田市、山下和洋社長）の「豊かさを届ける福祉用具サービス」をテーマに現場の実践を紹介する本連載。365日対応の同社では終末期を担当する例も多い。奈良営業所の笠目妙子さんは、余命1カ月の利用者の希望を福祉用具で叶えた。

担当することになった笠目さん。担当ケアマネジャーは終末期なども積極的に引き受ける居宅介護支援

シャワーの話によると、Aさんは60代の若さで余命宣告を受けたが、介護者である奥さんにとっても穏や

「窓からの景色がみたい」

援事業所に所属しており、笠目さんもそのケアマネジャーの依頼で終末期の利用者をこれまで何人も担当してきた。

かに暮らしていたという。

ただ今回の相談内容は、痛み

そんなAさんのどうしても叶えない願いが「窓から外の景色をみたい」だった。元々介護ベッドや

の緩和や急激な状態変化に備えたいといったものではなく、「福祉用具を使って離床を促し、Aさん

車いすはあったが、大柄なAさんと介護者の奥さんとの体格差が大きく、抱え上げて移乗させることはできない。退院後はほとんど

に窓からの景色をみせられないか」という依頼だった。ケアマネ

も、夫の願いを何とか叶えてあげ

たいという気持ちでいた。

笠目さんは「離床を促して窓からの景色をみる」を目標にリフトの導入を提案した。Aさんの部屋はそれほど広くなかったが、据置型のリフトなら設置できることを確認。あわせて車いすへの移乗スペースや動線も見定めた。いつ急変してもおかしくない終末期はスピードが勝負。すぐにデモの日程を決めた。

まずは別室でスリングシートの付け

方やストラップのかけ方を、Aさん

に代わって笠目さんを相手に練習してもらった。難しいイメージがつきまとうリフトの操作。自信がつかまでひとつひとつ確認しながら練習を重ねた。

慣れた頃、実際に笠目さんが見守る中、Aさんをリフト移乗してもら

らう。吊り上げられたAさんは「ブランクみただい」と笑顔で、

普段とは違う視点を楽しんでいる様子だった。そして、車いすで窓のそばへ向かうと、念願だったいつもの風景」をしみじみかみしめていた。

後日、笠目さんが電話で様子を尋ねると、「一人でも無事にリフトを使って、主人を車いすに移乗できました！」と奥さん。心から喜んでる様子に笠目さんもとて

残念ながら、リフト導入から数日後にAさんは他界。リフトを引き上げる際、奥さんから「ほんの数回でしたが、望みを叶えてあげられた。本人もとても喜んでいました。ありがとうございます」と感謝を述べられた。

リフトの導入が数日遅れていたら、Aさんの願いは叶わなかったかもしれない。依頼から導入までの速やかな対応がポイントとなった。

「お」くならにられたのほども残念でしたが、福祉用具を通じて、Aさんやご家族に喜んでもらえたことが今も心に残っています（笠目さん）